季刊

# 直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

冬号
12,1,2月

年間特集
## 直江津を掘る
## 6古老が語った 直江津の昔

巻頭エッセイ◉わたしの直江津
## 安寿恋しや

ミニ特集
## マニアックな直江津歩き

知の楽しみ
## 世界一の山脈◉関田山脈

フリースペース
## こんなまちがあった……2

# 直江の津

第四号　冬号
二〇〇一・〇二―十二・一・二

年間特集

## 直江津を掘る

6　古老が語った直江津の昔 …… 4
巻頭エッセイ　安寿恋しや　馬場和明 …… 3
ミニ特集　マニアックな直江津歩き …… 12
知の楽み　世界一の山脈　関田山脈　南木　均 …… 14
フリースペース　こんなまちがあった2　八木登美男 …… 22
読書びと　『宮本常一を歩く』毛利甚八著 …… 28
見る目　どぶね …… 30
東西海陸 …… 26
観音寺　鰻絵 ―あまりにも正統なるが故の異形― …… 20
読者から …… 27
情報・バックナンバー …… 29

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より



「Ｌ１号防波堤」（2001年）
峯田敏郎作
ＪＲ直江津駅前広場

# 安寿恋しや

馬場和明

そも、安寿姫とは何者であったか。

安寿の姫が死して（犠牲となって）、その弟が立身する時代ではあった。もはや、現世にあって弟が「姉」を祭り上げる時代ではなかった。

鷗外は、安寿の最期を次のように描いている。

「安寿は泉の畔に立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。」

「後に同胞を探しに出た、山椒大夫一家の追手が、此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安寿の履であつた。」

と、入水をほのめかし、近代の作家らしい潤色を加えている。

ところが、『説教集』「さんせう太夫」に登場する安寿の最期は、健気にも凄絶であった。

「丹後の国由良の港のさんせう太夫」のもとから、弟を逃がした後の安寿は、弟を庇うため敢えてさんせう太夫のもとに帰って行く。そして「十二格の登り階に絡み付けて、湯責め水責め」に遇い、「三つ目錐を取り出だし、膝の皿を、からりからりと揉」まれても、なほ弟を庇い続ける。ついに「天井よりもからこの炭を取り出だし、大庭にずっぱと移し、大団扇を持ってあふぎ立てて、いたはしや姫君のたぶさを取って、あなたへ引いては、『熱くば落ちよ、落ちよ落ちよ』と責め」られつつ、「十六歳を一期」として責め殺される。

まるで、かのオルレアンの乙女のごとく、魔女狩のさきがけを見るような、すさまじくも、凛とした死に様ではないか。

今や、京都府宮津市由良には「さんせう太夫」の屋敷跡があり、この物語に関連する遺跡が多いという。また、青森県の岩木山の祭神は、安寿姫という女神だという。弘前市の長勝寺には、姉弟の彩色像が安置されているともいう。岩木山の縁起によると、安寿姉弟は「山椒太夫に売られ、つぶさに艱難辛苦をなめた末、ようやく遁れて故郷に帰り、二人は岩木山の神に祀られた」と伝えられているという。

きらやかに咲けや　哀史の　むめ　さくら
踊れや　ごしやう　舞えや　ごくらく

そも、安寿姫とは何者であったか。

そも、「直江津」とは何ものであったか。

（上越市在住）

年間特集「直江津を掘る」その6

# 古老が語った直江津の昔

## ●二十年前に直江津を掘った人たちがいた

昭和五五年（一九八〇）五月、柿村書店主・柿村謙三の呼びかけで佐藤策次を聞き役に、古老三人が、一日縦横無尽に直江津を掘り返した。三人とは、荻野惣次郎（八八歳）いかや旅館（現・ホテルセンチュリーイカヤ）主人。知る人ぞ知るの大茶人。中戸賢亮（八四歳）真行寺住職。真行寺のだんなんとはこの人。ボランティア活動の先駆けとなった人である。宮崎久雄（八三歳）宮崎茶店主人。直江津町の助役を勤め、直江津の港湾史を最もよく知る人。聞き役の佐藤策次（七五歳）は〝策ちゃん〟と呼ばれ、直江津中学校長を長年勤め、直江津市最後の市長となった。国文学者としてその教えを受けた人も多い。（年齢は当時。四方とも故人となられた）

話題は、まさに縦横無尽多岐にわたり「上越新聞」（現・上越タイムス）に好評連載され、翌年『古老が語る直江津の昔』（柿村書店刊）として出版された。その中から港をめぐることを中心に本誌に再録しようと思う。（版元の了解を得て、見出しの変更や割愛した部分がある）

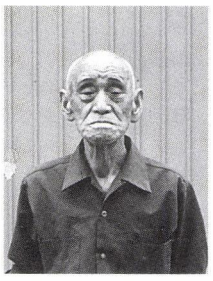
昭和五五年といえば、直江津港が大変貌を遂げ、今のような姿が見えてきたころである。直江津は宿命として、その歴史に〝港の問題〟を背負わなければならなかった。港とは我々が今、目の当たりにする直江津港のことではない。自然に翻弄され、政治に利用された――おらまちの港――のことである。古老が語った歴史がどのような事実を伝え、なにを物語っているのか。そのむこうに、今我々が抱える課題の答えを探ってみたい。合わせて、直江津ことばも堪能していただきたいと思う。

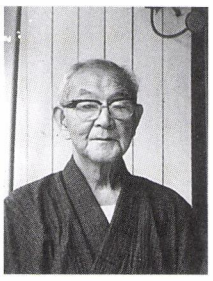
ただ、同じ時代を共有した方々であるため、会話中の時代などに前後するところがあることを考慮してお読みいただければ幸である。また、読者の理解を深めるため上段に注と港に関わるエピソードを紹介した。





佐藤策次


宮崎久雄


中戸賢亮


荻野惣次郎

写真は当時のもの



沖荷役の頃の〝直江津港〟の賑わい

高鳥順作（一八六八～一九五八）高鳥組創設者　衆議・貴族院議員　能生町出身
大竹謙治（一八七八～一九五六）頸城鉄道株式会社創設者　衆議院議員
浅野総一郎（一八四八～一九三〇）セメントを中心に海運、炭鉱、電力、土木などを起こした実業家。大河津分水　明治四一年起工、大正一〇年完成。
芳沢謙吉（一八七四～一九六五）外交官・犬養内閣外務大臣　旧諏訪村出身　生地に公園と記念館がある。
川合直次（吟風）（一八七四～一九三八）高田市近代化の基礎を築いた文人市長　旧直江津町出身。
直江津座　今の第一劇場。

## 港のうつり変り　政争の具にされた港

**佐藤**　直江津は昔から港の町と言われておったのですが。

**荻野**　港の改修工事として海岸の護岸工事を請け負ったのは高鳥順作さんです。あれは明治三三年ですね。後に、大竹謙治さんが代議士のころ……、そのころ浅野総一郎さんが来て港のことを調べましたよ。

**佐藤**　浅野総一郎さんはどういうお考えだったんでしょう。

**荻野**　浅野さんが港へ来た時分はねえ。新聞で信濃川をこの荒川（関川）へ落とすという話があった前後です。

**宮崎**　浅野さんが講演しなった時、聞きましたが、信濃川の水を田口か関山のあたりで関川に落とすという計画がある。それをしれば関川はいつも水が豊富に流れるようになって頸城平野は潤うと……。

**荻野**　あの時分にはもう大河津はできておりましたですよ。ああいうことがきっかけとなって直江津の港の改良に力がはいってきたですね。あれから後に、わしゃ町会議員していたころには新潟県と長野県が合同して東京で期成同盟会を開きました。芳沢さんを会長にしてね。長野から出ていた大蔵大臣や県知事なんかも来てなったわね。

**佐藤**　郷津湾築港の話はいつごろのことでしょうか。

**中戸**　郷津湾は私ら素人の考えだが、底は岩盤だし山が近いからあそこに港を作るのが当然のことだろうと思っていたね。

**宮崎**　郷津湾はね。長岡の石油会社が資本を持ってきて築湾しようとした。郷津湾築港の大将は川合直次さん、荒川改修の方は林さんなんだ。二人でケンカしてねえ……。河口改修派の政友会は直江津座を借りて大会をやった。米社師（米の相場師）の志賀弥平太が一ぱい飲んでいったんだ。その時分はやったヤジで「ヒヤヒヤ、ノーノー」って言葉があるんだが、それをよく知らんで「ヒヤヒヤ」せわんからならんどこで「ノーノー」せっちゃった。みんなに怒られて、くらすけられたこてね（笑い）。郷津湾には榊原藩の時代に築港したという石積みがあんねかね。

**中戸**　郷津湾はもっと真面目に考えるべきものだった。それを政党のケンカの種にしちまった。政党のためにずいぶん損しているわね。

**宮崎**　川合さんと林さんはどんなにか仲の悪いかったもんかね。おっかないのさね。サァっていや、シャンツケルゾって（笑い）。

## 長野からのラヴコール

明治三四年（一九〇一）、長野市は、郷津湾港期成同盟を結成。市会・県令・内大臣あての建議書を提出。三〇年（一九〇三）に再び築港の建議と**頸城三郡の長野県併合の建議**も併せて出している。次いで四〇年（一九〇七）にも次のような請願書も出している。

直江津開港請願書

長野市並びに長野商業会議所は直江津開港の儀に付き謹んで貴院に請願仕り候直江津港は日本海岸の要地にして帝都の後門に当り露、韓貿易の基点たる位置にあるのみならず本県は勿論上甲州と密接の関係を有し為めに物貨の出入、年々其多きを加うると同時に外国品輸入の如きも頗る巨額に達せり。殊に第十三師団の高田市に新設せらるゝや物資の需給は益々増大ならむとす。然るに是等輸入の貨物は目下函館、神戸、新潟等の税関を経由し、此間時日と冗費とを徒消し、供給者の困難需要者の損害実に尠からざるなり伏して願くは能く其事情を洞察せられ速かに審議開港の措置あらむことを熱望の到りに不堪候

請願の要旨

右陳述の趣旨に依り速に直江津開港の御詮議相成度候

右議院法第六十二条以外衆議院規則第四十四条以下の規定に依り衆議院議員の紹介を以て請願候也

（『長野商工会議所百年史』より）

長野県は直江津港に拠出金を出して（平成一三年一二月、田中長野県知事中止を表明）いることも、その想い（？）とあわせて忘れてはならないことであろう。

古川長四郎（七代目）（一八九五～一九五九）佐渡汽船初代社長　昭和二年県会議員。
昭和七年頃の直江津港には、はしけ八十隻、曳船九隻があった。はしけ三、四隻を一組として小蒸汽船が曳航した。
高橋達太　高達回漕店創業者。

**宮崎**　おら向いの古川*（長四郎）さんが県会議員になって、初めて港の補助金を県からもらってきた。さあ、あんた、ドラ息子を県会に出したようなもんだってね……。せうのは補助金をもらえば地元の負担金がいるでしょう。そんつらバカなことはないって、龍泉寺で改進党が大会を開いた。友だちと三人で乗り込んで行った。そうしたら向こうはいっぱこといて、多勢に無勢で袋だたきに合って追い出されちゃった（笑い）。

## 沖荷役　日本海一の海産物取引

**佐藤**　そのころの港は、荒川まで船がはいったもんですか。

**宮崎**　永代橋のそばへ「佐渡丸」を入れたのが最初です。

**中戸**　その前は石炭揚げ場（保倉川左岸）から小蒸気を出して……「謙信丸」でしたかね。はしけ*を引っぱってあそこから出ては、永代橋があるため煙突を倒しては出入りしていました。ずいぶん石炭が入ったのさ。

**宮崎**　八万トンから十万トンぐらいもね。

**荻野**　高橋*達太が三井物産の石炭を扱うことになりましてね。それは大正三年ですわな。荒川は冬になるとご承知のように砂が海から上がってきて、港の水戸口をふさぐんです。それをジョレンでもってかき出して水戸口を開けると、高橋さんが三井へ「水戸口が開いて荷役ができる」と言って連絡とって、それで石炭船が来たもんでした。はしけには女仲仕がいましてね。あれはよその港にはなかったでしょう。

**宮崎**　河口が加島屋の下まで行ったもんです。水戸口を切ると川のこっちの方がふさがるでしょう。すると池ができる。おら子どものころ、そこで浴びたもんだ。

**中戸**　冬になると水が減るでしょう。海へ突き破ってまっすぐ出らんないんだ。そのために波に押されて東へ行くか西へ行くかしたもんですね。いよいよ春になると水の勢が返るでしょう。すると河口の正面に土砂があるから上流で湛水するんですよ。それで、はしけの若い衆が命がけでたまった土砂を切る。この仕事は本当に命がけだってねえ。

**宮崎**　艀会社の小出のおじいさんが若い衆をしかってねえ。ジョレンに四、五メートルもある長い柄をつけて土砂を掘ったもんだ。

**荻野**　まん中へ水を通せば、はしけが通る。

**佐藤**　そのころの港にたくさん入った荷物は全部沖荷役でしたか。



浜線から東京の品評会へ米を積み込む。

明治一八年直江津―新井間が開通、翌年、関山まで開通。設立当初は直江津線と仮称。上野まで全線開通後信越線となる。

室孝次郎（一八三九～一九〇三）明治維新の志士、政治家、信越線建設の功労者。

保坂貞吉　旧有田村の大地主。

鈴木昌司　政治家、頸城自由党を創設。衆議院議員。

北越鉄道　現在の信越線（直江津以東）。明治三〇年直江津から鉢崎まで開通、明治三七年新潟まで全通した。民営の北越鉄道株式会社によって運行された。

**宮崎**　沖荷役でした。大蒸気・中蒸気・小蒸気とあった。小蒸気では御代島丸。直江津商船の春日山丸、淡海丸これは中蒸気だ。石炭を運ぶ大型船が大蒸気だ。

**佐藤**　戦前、小樽へ行きました時、日本海岸で直江津ほど海産物の商いの大きいところはない。一軒の商店で当時のお金で百万円ほども買って蔵に入れちまうと言うのは、直江津の海産物問屋だけだ。それほど直江津の海産物の取引きは盛んだって話を聞いたことがあります。

**荻野**　小樽と言えば、直江津から行って小樽の商工会議所の会頭になった人がいます。岡田さんと言うんですがね。そこの家の本家が北海道の方へ移られて、小樽で商売をしてなった。岡田さんの石碑が五智さんのお経蔵の裏にあります。後に娘さんが直江津へたずねて来られて、石碑のところへ案内したことがあります。

**宮崎**　直江津商船の淡海丸と春日山丸が小樽と直江津の間を海産物を運んでたんだ。船が夕方港にはいると、浜へ海産物……カズノコからショービキなんか揚がるでしょう。すると、荷主の海産物問屋ごとに山にする。提灯持った問屋の若い衆が集まってね「ヤマキチ　オタマヤ　ここだぞう。カネイチ　ウチヤマ　ここだぞう」ってね。やったもんです。そうすると、こんどは女どもが出て荷主の倉庫へ運んだもんです。

## 鉄道の敷かれたころ

**佐藤**　上田から中山道へ出て東京へはいる計画があったと聞きますが。

**荻野**　箱根を通すのがやっぱり難しかったんじゃないですか。中仙道で東京―京都―大阪へということを考えたんでしょう。明治十八年、東海道より早いんですからたまげます。

**柿村**　直江津―上野間が開通したのは明治二六年十二月となっていますね。東海道線は二二年七月となっていますから、早いですねえ。

**荻野**　高田の室孝次郎さんを始め、保坂のだんなんとか鈴木昌司……そういう人が主催されて直江津を中心に鉄道ができたんでないですか。いちばん初めに関山までできたんだそうですね。

**宮崎**　なんといっても日本でもここは早かったんだね。新橋―横浜に汽車が通ってから（明治五年）じきにそういう考えがあって、建設資材を運ぶのに直江津を利用した。駅は最初港にできているんですからね。

## 転がる築港計画

明治二四年（一九一〇）、旧ドック周辺の護岸によって、河口港としての直江津港の近代化が始まるが、河口港の宿命として土砂の堆積がネックとなり、郷津湾築港計画が政治的思惑も絡んで、いつまでも燻り続けることになる。

本格的に築港が開始されるのは大正九年（一九二〇）のことである。以降、昭和一一年（一九三六）まで、一一七万円余の県費により関川河口の右岸（東側）に三九〇mの道水堤、左岸（西側）に四九八mの砂防堤が完成。港内に浚渫船を常備させ小型船と艀の出入が容易になったという程度であったが、それでも港の機能としては大幅に拡大し（図1）、昭和三三年（一九五八）の河口分離による大改修に至るまでの直江津港の原形が出来あがったのである。

このような一連の改修工事が進むなかで、昭和一一年（一九三六）に河口を離れる計画が発表された。三千トン級の船舶を接岸させる計画で、図2のようなものである。ほぼ旧直江津の西海岸が港湾施設になり、運河によって旧港と連絡するようになっている。また昭和一五年（一九四〇）には、河口の東側に、同じく三千トン級の船舶が入港可能な港を造ろうという計画が浮かんできた。関川東導流堤を北東方向に延長し、その東側に防波堤を築造する案である。関川とは運河によって接続させている。現在の直江津港中央埠頭周辺が港になっていたはずである。

しかし、両案とも戦争等の事情によって、実現するには至らなかったことは言うまでもない。

昭和二一年（一九四六）、当面二千トン級船舶の接岸を目ざして戦後の復旧工事が始まった。二六年（一九五一）ようやく一千トン級貨物船「武蔵丸」が入港、九月、重要港湾に指定されたが、五〇〇トン以下の入港が限度であった。

昭和二八年（一九五三）、直江津港技術調査委員会で「河港分離」（河口分離）案が立てられ、昭和三〇年（一九五五）、国の第七回港湾計画会議をへて翌三一年着工。その後、数次の大幅な計画変更により拡大し、現在の姿になっている。

**中戸**　越後米を東京へやらんきゃならん。そのためにもここは早かったんでないですか。

**佐藤**　先に港に駅ができたというのは、港に鉄道建設の物資を揚げるということがずいぶんあったんですね。

**荻野**　直江津から関山まで鉄道をこしらった。その時、船でドイツとイギリスからレールを持ってきて港に揚げました。私はドイツばっかと思っていたら、レールはイギリスと両方あるんだそうです。

**佐藤**　いかやさんがいまの麓さん（麓病院）の前に駅があって、そこにいなしたのは明治十七年以後ですか。

**荻野**　もちろんそうです。駅ができたのは十九年ごろではないですか。

**中戸**　北*越鉄道（現在の信越線直江津以東）は鉄橋の向こう側の春日新田駅が終点だった。

**宮崎**　おら子どものころ、直江津から春日新田の駅まで二銭だった。二銭で鉄橋渡られんなだねかね。それがおもしくて、銭ためて汽車に乗ったもんだわね。そのころ汽車の出る五分前になると「チリン、チリン」って鈴が鳴った。その音を「客たらん、客たらん」せってね（笑い）。そして、おらウチから出て来て、はっちょうじ（八王子・八坂神社）の前あたりに来て、その音を聞いて「まだ五分あるわ」せって行ったもんです。

## 港と鉄道で持っていた町

**佐藤**　直江津駅が現在の位置にできたのが明治三一年と言うことですが。

**荻野**　浜線というのは生きていましたから、貨物はみんな浜線で積んでいたんです。石炭を積むなり、魚を積むなり、みんな浜線でした。直江津の沖にはサバ漁のいい所がありましたし、タイのつき場もありました。新潟の漁師も直江津沖へ漁に来ていました。ところが新潟へ持って帰るより直江津へ陸揚げして大阪へ送った方が一日早いんです。ここは貨物の配車もよければ、魚の積み出しに都合がいいんですね。

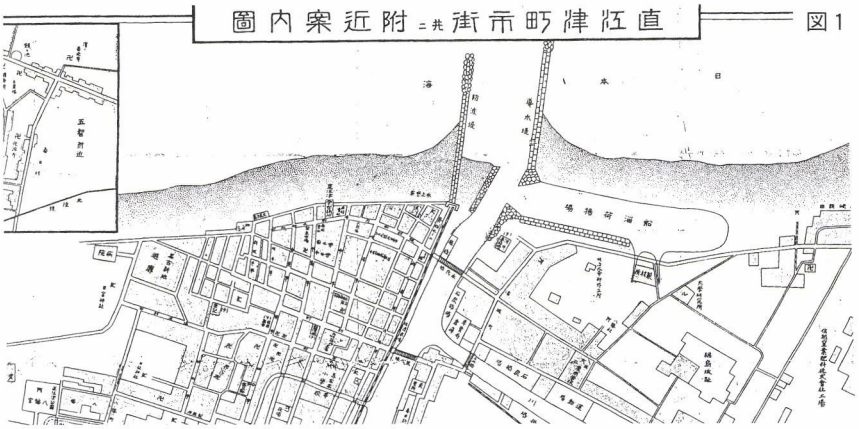
**佐藤**　直江津の経済というのは、港を中心にして石炭の搬入、魚類の水揚げ、越後米の積み出しということになりますか。

**宮崎**　そうだね、直江津の海産物商というものは、いっぱいこと商品を扱ったもんだね。とにかくあんた、信州・上州まで荷を出したからね。浜線には鉄道の人が常時いて、海産物商の出す品物で、一日に二度三度

図2




図1




上（図1）は昭和3年、直江津商工会議所発行の市街地図（部分）である。時代が多少そぐわないが、当時の護岸、築堤の様子がよく分かる珍しい貴重な一枚である。（片桐家所蔵）

左（図2）は、昭和11年の関川左岸築港計画図

も貨車が満ぱいになって行くんだからねえ。どれだけ扱ったもんだかね。

**柿村**　いったいどのくらい直江津には海産物問屋があったもんですか。

**宮崎**　片原町にね……オタマヤ、ツノシン、カネイチ、ヤマキチ、シメアゲ、カネアゲイチ、カクダイ、カネキュウボシ、ヤマギシ……。

**佐藤**　専売になる前は塩もはいってきたと聞いてますが。

**宮崎**　「製塩」という会社があって塩をやっていた。

**佐藤**　港と鉄道の他に産物はなかったんですか。

**中戸**　そりゃなんにもないね。

**荻野**　北越線（北越鉄道）のできない時は、浜地の者は高田へ行くっても歩かんきゃならん。そこでみんな直江津へ魚なんかを持ってきたもんです。海で獲れる生物（なまもの）はみんなここへ集まりました。それに佐渡からも来るでしょう。北海道の乾物も来る。私が長野の商業学校へ行っているころには、もう直江津へ買いに来る人がだんだん無くなって、こんどは、直江津から販売に出かけるようになりましたが、その前までは、直江津へ来なければ海産物が無いもんですから、この「いかや」へも信州あたりから泊りがけで商人が海産物を買いに来たもんです。浜地から直江津へ出て来て、直江津から上田へ行って商売した人もいます。上田の伊藤さんなんて人も、もとは直江津へ買い出しに来ていましたが、その人は後に上田市長になりました。

**宮崎**　昔の人間は、着物一枚買うとかシャッポ（帽子）を買うとかいうと高田へ行った。あんばいが悪くなったと言っては高田の医者にかかる。「なーんでお前ら、高田へばっか行って銭落してくんなだ」せって、せわれたもんだけも、こんだ大きな商人になってくると違う。ザイへ行く砂糖の問屋って直江津しかないんだねかね。炭、石炭、石油、それにこんだ海産物。これを売っていれば、町の者が高田へ細かい物を買いに行く何倍も高田の銭が直江津へ来る（笑い）。今度は、生の魚を砂山あたりの女ごしょが高田へ売りに行くんだ。これがまた面白いんだ。直江津の町で売るときは「タラえー　イワシえー」って言って売るのに、高田へ行くといい声張り上げて「タラいらんねぇー　イワシいらんねぇー」、言い方が違うんだ（笑い）。春日山の裏の正善寺の女ごしょなんかも高田へ行くと「みょうがの子召すかあー」っていい言葉を使う。直江津の財力というのは大したもんだった。なんだって問屋がいっぱいある。米穀取引所もあった。

## 政争の具か？

『信濃川百年』（建設省北陸地方建設局・一九七九）によれば、鉄道院は東京近郊の電源需要の拡大に対応するため、原敬内閣の資源節約という閣議決定に沿って、電源を信濃川の水力に求め、いくつかの計画が立案された。その一つに「関川放流案」があった。長野県の戸狩付近にダムを築造、仏ヶ峯の分水嶺を貫く隧道によって新井市の水上（みずかみ）で発電の後、関川へ放流、落差三〇〇m、出力五〇万kWの発電量を得ようというものである。しかし、一〇kmも及ぶ隧道と、蒲原平野四万町歩の稲作農家とって、信濃川の水利権はまさに死活問題となるため、大正八年（一九一九）七月、小千谷案に決定した。

計画は関東大震災と不況による民間電力の過剰により中止されてしまったが、その後も調査研究だけは続けられ、大正一四年（一九二五）小千谷案で工事再開が決定されると、第五一議会において、大竹謙治は「関川放流案」で政府と激しく対立した。この案を浅野総一郎が後援するところとなり、高田市を中心に「信濃川発電所位置変更期成同盟会」が設立され活発に運動を始めた。その矢先、浅野の突然の死により運動は弱体化を余儀なくされ、ついに断念せざるを得なくなった。委員の一人、上越電力の父国友末蔵が積極的に推進していたことは、計画が実現可能であることを裏付けるものであり、その点において（蒲原の水利権は別として）は残念な計画であったと言えよう。

立案者は内務監査だった原田貞介博士で、小千谷案より落差が三割増、水路延長は四分の一、発電量四割増、工費は三千万少ない一億三千万円という計画であった。

この計画がどのようにして直江津港改修と関係づけられたのであろうか。それは関川に放流することによって水量が増し、「河口に土砂がたまることがなくなる」という、極めて単純なものであったようだ。（運河を開削して直江津へ注ぐという案もあった）

つまりこの運動の裏には中央電気と信濃電気の対立と、政党間の対立があり、郷津湾築港派と河口改修派の対立が、それに利用されただけではなかったかと憶測される。

**佐藤**　材木もそうでしたね。米穀取引所があったのは、直江津へ米が集ったと言うことですね。

**中戸**　昔はね、越後米と言えばなんと言っても頸城平野だった。蒲原の方は沼地で洪水なんかも多かったしね。直江津へ集った米は大船に乗せて馬関（関門）海峡を通って大阪まで運んだもんだ。何石ぐらい米を積んだもんかねえ。米を運んで行って帰ってくる時空船（からぶね）じゃもったいないから塩とか瓦とかを考えて買ってきたもんなんだね。だからこの辺には、昔からとんでもない所の産物がはいっていたもんです。

## 直江津の現在と将来

**佐藤**　このへんで、直江津のこれからの発展についてお話しください。

**荻野**　いまのような、あんなとこへ港を作るなんて思ってもいなかったね。西へもう一つ突堤だして、川の底をさらうようなつもりでしたわな。よくあんなでっかいもんになったと思って、このごろ見てたまげてます。

**宮崎**　突堤まで行って帰ってくるってや、一里（4km）もあるってね。

**佐藤**　港湾局で聞いた話ですが、直江津で港作った気になれば、日本中どんなところでも港を作れるっていっています。

**荻野**　港が発展しなければ、町の発展もありません。昔は交通の要と言われたんだけも、北廻り新幹線（北陸新幹線）だって直江津は素通りでしょう。

**宮崎**　なんといっても港だな。港を発展させてどうするかだね。

**荻野**　港に結びついた工業ですわな。人を呼ばんきゃならん。

**佐藤**　観光面なんかはどうでしょうか。

**荻野**　まあ、海水浴場はいいでしょうけどね。親鸞さんのことは直江津のしょうは、なんも知らんけど、小丸山別院（国府別院）にはあんた、おらたまげている。あんなに人が来るかと思って、夏なんかずい分泊まってるんですよ。昔、私どもで信州の学生をたくさん泊めたことがあります。パンフレット作ってね。春日山から廻って来て、翌日は海で遊んで、信越化学見て帰ったもんです。ウチで食事にオオバイワシを食べさせると喜んだもんです。四年生以上は必ず来たものです。

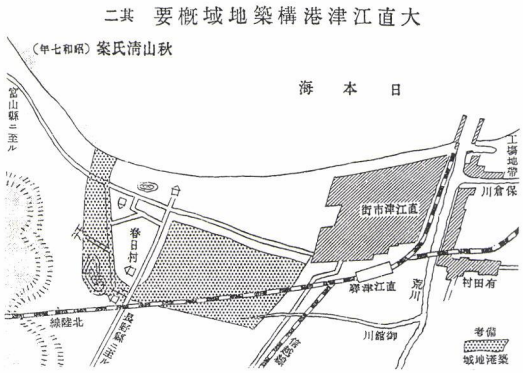
**中戸**　いまは素通りして行ってしまう。ここへ泊まらんでいい。場所がよすぎるんだわね。親鸞聖人の流罪七百年（昭和三一年）の法要ん時に、とにかく日本全国から大変な人がきたんだからね。あれだけの国分寺は

## 机上の空論か？

「高田新聞」に、昭和七年（一九三二）九月一日から四回にわたって「裏日本に一大海港を構築せよ《日満両国の経済的結果に伴う必然の急務　東亜貿易の局面急転に処する国家百年の大計》」と題して元満鉄用度課長秋山清の論文が掲載されている。再び、翌一〇月一七日から六回にわたって「大直江津港の構築に就いて」と題して掲載している。

これを受けたかのように「大直江津港期成会」が発足し、当時、直江津町議であった吉田修次が『大直江津港問題』（大直江津港期成会・昭和八年一〇月）という菊版・七四ページの冊子を発行、秋山論文の再掲を中心に各新聞の反響を詳しく紹介している。秋山論文は計画地を図示していないが、冊子には左のような図面が掲載されている。また、昭和八年（一九三三）八月八日付「東京日日新聞」の記事として「直江津築港に軍部も関心　五智を利用して内港を造れ」という天野十五旅団長の談話と、芳澤前外相に尽力を依頼するという記事も載せている。

秋山論文は、当時の「高田新聞」と「高田日報」がくり広げる政争の中で、期成会・新聞社のために書いたとは思えないのだが、この一件がその後どのような展開を見せたのか、後続資料がまったく見当たらない。




居多神社前の谷になった部分から国府別院の北側に運河を掘り、かつて一面の田園であった北警察署周辺を内港にしようとする計画である。

全国にだってそうない。親鸞聖人と結んでも立派な観光資源ですな。

**宮崎**　郷津の岩殿山だって国宝（重文）なんだねかね。おら甲府へ行った時ね。武田信玄のお宮さんへ行った。そうしたらタクシーの運ちゃんが「ここまで来なしたなら、恵林寺も見なさった方がいい」、しまいに昇仙峡から身延山まで行っちゃった。商売上手だわね。それおまん、ここらの運ちゃんは、「国分寺へやってくれ」せうと、国分寺の裏まで乗せてって「ありがとござんした」せって帰ってきちゃう（笑い）。わし、よく、国分寺せうお客あったら、「この近くに、小丸山別院もあるし、春日山もあります」ってなぜせわんのかって、せうんだ。

**中戸**　観光を生かすなら、そういう教育をしんきゃいけんのだ。

**宮崎**　直江津で売るもんってなにもないんだね。

**中戸**　せんべいでもなんでも直江津とか、五智とかの名前をつけたもんをね。名物なんてどこで買っても中味は似たりよったりなんだから。

**荻野**　商売してるもんは苦心してるんですよ。苦心してるんだけもやり通して、それまでに盛り上がるぐらいになるって言えば、五年や十年ではだめだね。その根気がいまのもんは続かない。

## 直江津を知ってほしい

**佐藤**　直江津の人は港を知らんし、工場でどんなものができるかも知らんですわね。

**荻野**　工場で生きるにしても、これからは国際的な考えが必要ですわな。直江津の港は立地条件がいいんです。

**佐藤**　中国貿易ですね。長野・群馬など直江津港と結んでいるところが何を必要としているか。大きな商社がここへ来てくれればいいんですが。地元の人が理解を持って応援しなきゃ、向こうだってきませんわね。

**中戸**　第二艦隊来た時のこと思ってみない。あんときゃ埼玉までビラ配ったんだからね。その意気込みを思えばどんなにでも人を集められる。

**宮崎**　来る汽車来る汽車、満員の人がみんな直江津で下りたもんだ。

**荻野**　時代の移り変わりをよおく見て物を考えなけりゃなりませんな。若い人に直江津をよく知ってもらいたいです。

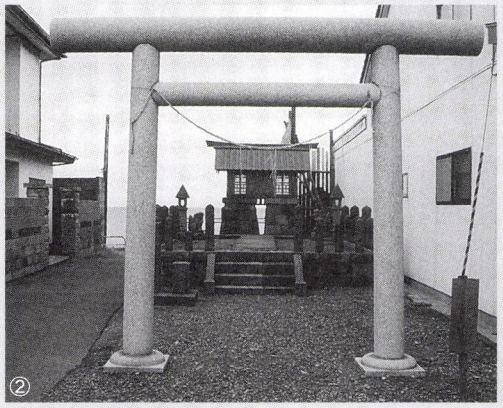
資料／『新潟県人物百年史頸城編』『時代に挑んだ先駆者たち―にいがた人物伝』『直江津町史』『上越市史資料編７現代』『アルバム直江津』高田図書館蔵「高田新聞」「高田日報」

# ミニ特集

## マニアック（度の過ぎた熱中者）が見つけた、直江津路上観察。

## マニアックな直江津歩き


①


②

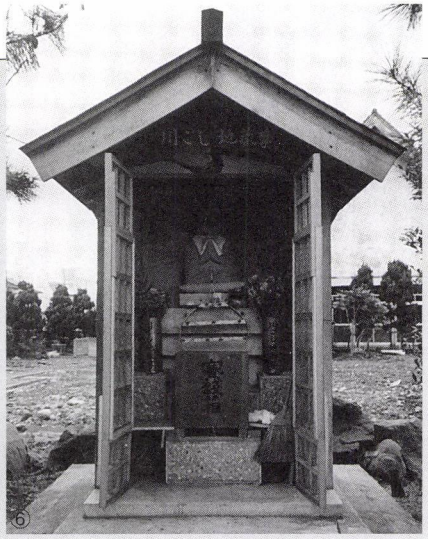
何事も、やり過ぎると、悪乗りとなる。しかし、見落とし、見過ごし一つ一つ拾っていくと、何かが見えてくる。たとえ見たものが、

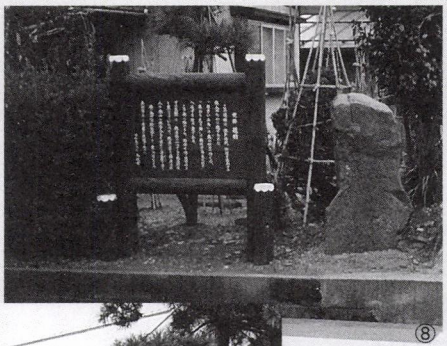

③


④


⑤







意味のなさそうなものでも、横道（よこみち）しながら、まちを歩いていると、わけもなく楽しくなる。







① 愛宕神社に施されたみごとな彫刻。②後ろに海が見える恵比須稲荷。③空を斜めに切る煉瓦塀。④道路元標。⑤「柳清水の名号」の由来となった柳清水。⑥春待ちの商人の船が関川の流雪に巻きこまれて遭難、供養の「川こし地蔵尊」。⑦八幡神社の古い狛犬。⑧「右さいみち　左おう志う路」と書かれた道標。⑨上野浄明院・妙運発願、8万4千体地蔵のうち62,023番⑩。アーチの扉を持つ、石段を護る煉瓦塀。⑪阿比多神社のヤブツバキ。

# 世界一の山脈 関田山脈

南木 均 みなきひとし

故郷に世界一の山脈があることをご存知ですか？

『自然災害科学事典』は、山脈を次のように定義しています。

周囲の平地から、ある程度の比高をもって高くなった起伏量の大きなものを山地という。山地のなかで、特に幅が狭く線状に連続して延びているものを山脈という。

これによると山脈とは、ある程度の高さの山々がほぼ直線状に、ある程度の長さで連なっている地形と理解してよいでしょう。

ところで、新潟県内には国内最高と最低の標高をもつ山脈が存在します。

最も高い山脈は、新潟県のほか長野・岐阜・富山の四県にまたがる飛騨山脈（北アルプス）で、標高二～三千メートル級の高山が長さ約一五〇キロメートルも続きます。逆に最も低い山脈は、中条町付近の櫛形山脈で、標高五〇〇メートル級の山々が約一五キロメートルほど続きます。

## 関田山脈という名を知ってますか？

関田山脈は旭日の昇る彼方、中頸城郡と東頸城郡が長野県との県境を形づくる標高千メートル級の山脈です。妙高村の斑尾山（一、三八二m）付近を南西端とし、北東へ延びて松之山町の天水山（一、〇八八m）付近までの、長さ約三五キロメートルの範囲をいいます。代表的な高峰は、鍋倉山（一、二八九m・板倉町）、仏ケ峰（一、一四〇m・新井市）、菱ケ岳（一、二一九m・安塚町）などです。（火山の斑尾山を含めないとする説もあります）

## 関田山脈は高さ世界一の山脈

標高日本一の山脈は三千メートル級の高山が連なる北アルプスですが、標高千メートルの山々が連なる関田山脈も「高さ日本一の山脈」といわれています。おそらく「世界一の山脈」であろう、ともいわれています。

ただし、それには地質学的な説明が必要です。

関田山脈を構成する地盤は、深い海底で堆積した土砂で出来ています。それが隆起によって七八万年前に地上へ姿を現したものです。その後、マグマの貫入や噴火による降灰などを受けながら隆起・上昇を続け、高さ千メートル級の山脈を形成したのです。

七八万年間で千メートル級の山脈を形成した例は全国どこにもありません。おそらく世界にも例がない極めて特異な形成の仕方です。

参考までに比較すると、隣接する東頸城丘陵地帯は関田山脈とほぼ同じ時代の地盤で出来ており、同時代に隆起しましたが、全体的には標高が百～三〇〇メートルであり、高山や高峰でも五～六〇〇メートル程度です。

つまり、地質学的には関田山脈は極めて短い時間で形成された異例の山脈であり、若い地質である「第四紀の地層で構成される山脈では日本一（世界一？）の高さ」なのです。

ですから宣伝下手の我々県人も「世界一の山脈でブナ林をトレッキング」とか「世界一の山脈の水で造った酒、そば」などのキャッチフレーズで故郷をPRしてはいかがでしょう。



清里村・山荘京ヶ岳前から関田山脈を望む
手前は坊ヶ池、右手の高峰が鍋倉山、黒倉山
その左の、ほぼ同じ高さに見える広がりが光ヶ原高原

なお、関田山脈の頸城側は、全体的に緩い傾斜の地形をなし、標高七〇〇メートル付近より上部には光ケ原高原のような百ヘクタール以上の平坦な広がりがあります。しかし、山間部には浸食による大小の沢や渓流河川が急峻で深い谷地形をつくり、山麓部には扇状地が発達しています。

いっぽう東頸城では山麓部がそのまま東頸城丘陵地帯へ連なり、山脈との境目が明瞭ではありません。

## 頸城の大地は信濃川が造った

日本一の大河信濃川は長野市から北東の十日町市へ転じて越後平野を縦貫し、その長旅を新潟市で終えると日本海に注いでいます。

しかし約八〇万年前までは、まだ関田山脈や妙高山が存在せず、頸城の大地は深い海底でした。日本海が長野市付近まで大きな入江のように入り込んでいたのです。このため北アルプスや関東山地（甲武信ヶ岳など）の水を集めた信濃川は、そのまま日本海である頸城の地に注ぎ込んでいました。その時間は一千万年以上に及びます。

長い地質時代の時間のなかでは、地盤の隆起や陥没あるいは氷河期や間氷期などがあり、海岸線は北や南へ大きく移動を繰り返しました。その過程で信濃川は頸城の大地を造ることになる大量の土砂を運び込んだのです。つまり、意外かも知れませんが「頸城の大地は信濃川が造った」といえます。

なお、頸城の大地が海であったことは、新

井市平丸で貝化石が採れることや、米山、尾神岳が海底火山であることから分かります。

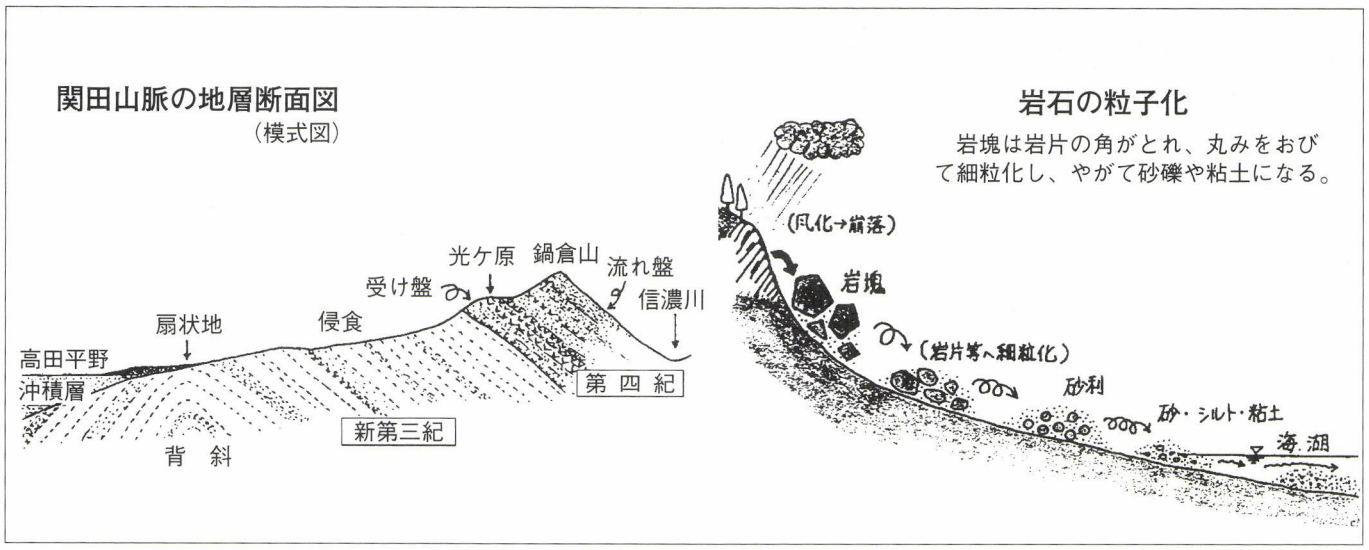
また、信濃川が流れていた証拠は、関田山脈の山中、あるいは矢代川上流域などに良質の砂利が分布することや、その石質の発生源などから分かります。

## 頸城の大地誕生

関田山脈の上部、標高七〇〇メートル付近から山頂部は、魚沼層と呼ばれる地層が分布しています。魚沼層は砂利や砂、粘土などで構成される約二百万年前から七八万年前までの海成堆積物です。

ところで、どうして一〇〇万年前などと分かるのでしょうか。粘土や砂利などは初めからその形態で存在しません。固い岩石が破砕したり、欠け落ちたりした岩片などが、洪水や土石流などによって下流へ運搬される途中でさらに細分化したものです。ですから砂利や粘土などの地層の成分を解析することによって堆積した年代を測ることが出来ます。また、堆積する過程で微量ですが樹木の葉や種子・花粉・藻などの植物が含まれたり、ときに虫・魚貝類などを含むこともあります。これらの化石の含有炭素量の測定からも年代が測定できます。ほかに、火山灰や石灰質成分の含有などから測定する方法もあります。

さて、第四紀更新世の中期である七八万年前ころから県内各地で地盤の隆起が始まりました。そのとき関田の大地も隆起活動が活発化し、深い入江状の海が次第に浅い海となり陸上に姿を現した、と考えられます。すなわち、私たちの暮らす頸城の大地は、約八〇万年前に誕生した日本列島のなかでも比較的新しい大地なのです。そのころの高田平野はまだ水深五〇～六〇メートルくらいの浅い海であり、その後、関川や保倉川などが運び込んだ土砂によって湿地や潟を残しつつ次第に平野が形成されていきます。




## 関田山脈の激しい隆起と褶曲

関田山脈の地は、海底で一、二五〇万年前から一千万年以上の時間をかけて土砂を堆積し続け、七八万年前に陸化しました。地球の誕生が四六億年前であり、日本列島の骨格ができたのが二、五〇〇～一、五〇〇万年前なので、七八万年前というのは極めて若い大地です。

陸化したあとも現在まで活発な隆起活動が続きました。なぜ活発な隆起が続くのか、その理由はよく分かっていません。おそらく頸城の地がフォッサマグナに位置していることや長野県側の構造線、火山活動などが複雑に影響していると考えられます。

いずれにしても日本海側から押す強い力や火山性マグマの影響などによって、関田の大地を構成する地層は〝かまぼこ状〟に曲がって隆起・上昇し、一千メートルを越える高さにまで押し上がりました。

ちなみに、一千メートルを七八万年の時間で割返した上昇速度は一年間平均で一・二八ミリメートルとなります。実際には、マグマ

の貫入時などには平均値よりも激しく上昇したことでしょう。地質時代的には、七八万年という時間は極めて短い時間です。なにしろ地球誕生から現在までを一日と換算したとき一五秒にも満たないのです。

## なぜ、高原や池があるのでしょうか？

関田山脈の地図をみると、標高七〇〇メートル付近から上部に高原状の緩斜面や、大小の池が点在していることに気付きます。

板倉町の光ケ原高原や菖蒲（大島村）、大厳寺（松之山町）は、百ヘクタール以上に及ぶ大規模な緩い斜面になっています。脊梁鞍部にある平丸（新井市）、関田（板倉町）、梨平（清里村）、野々海（松之山町）などの峠にも平坦な広がり地形をみることができます。また、斜面の随所に大小の湖沼が散在しており、山稜付近には沼池（斑尾）、桂池（平丸峠）、ヨシハ池（羽山）、茶屋池（関田峠）、野々海池（野々海峠）など、中腹部には玄藤寺池（板倉町）、坊ケ池（清里村）など、たくさん見ることができます。

なぜこうした平坦地や湖沼ができたのでしょうか？　関田山脈の隆起量は、長野県側よりも頸城側のほうが大きいため、地層面に沿った崩壊が起きにくい「受け盤」構造になっています。また、関田山脈の標高七〇〇メートル以上の山頂部は、砂礫が優勢な魚沼層であり、多くの火山灰を含有しています。このため火山灰による団結、いわゆるセメント効果なども作用して、崩れようとする「歪み」の力が蓄積され続けた結果、異常に巨大なエネルギーが溜まったと、思われます。そこに推定ですが地震や活断層などがきっかけとなって極めて大規模な崩壊が起きたと考えられます。崩壊を起こした跡は、滑り落ちた土砂が安定した緩やかな斜面になります。つまり、光ケ原高原などの広大で平坦な緩斜面が形成されるわけです。また、散在する大小の湖沼は、崩壊による渓流のせき止めや崩壊にともなう凹地が残ったものと考えられます。こうした地形が形成されたのは、崩壊土砂に含有する火山灰や埋没木片類などの炭化物から、おそらく一三～一五万年前の出来事と考えられます。



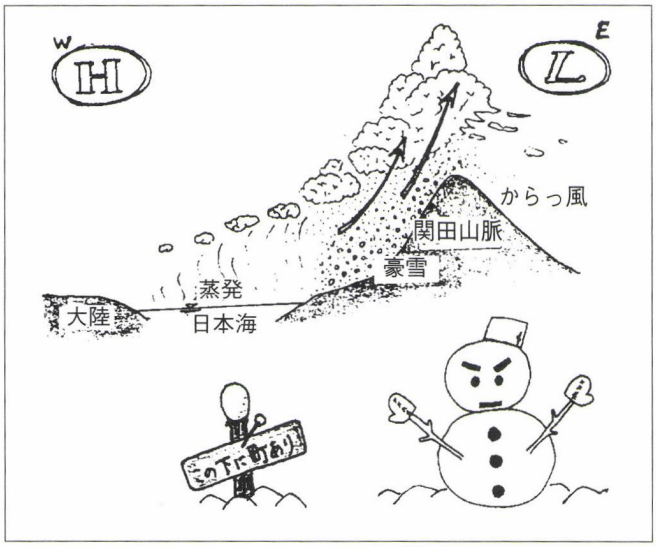
玄藤寺池（板倉町）で釣を楽しむ人

## 関田山脈は日本一の地すべり地帯

関田山脈を構成する地層は互層であり、保水性に富んだ礫層や砂層が挟まっているため、常に地下水が溜まりやすい条件をもっています。また、関田山脈は日本はおろか世界でも例をみない極めて激しい隆起・上昇を起こして形成されました。このため地盤には無数の亀裂やすき間が著しく発達しています。その亀裂やすき間に地表から浸透した地下水が溜まると、地盤の重みや水位の上昇などによって次第に土中の間隙水圧が高まり、浮力のように作用して土塊を不安定にします。いっぽう、遮水性の高いシルト岩や泥岩は、地下水や地盤の荷重などの環境条件によって、数十年から百年前後で軟質な粘土に変化しやすく、これが地盤を滑動させる「すべり面」になります。つまり、このような特性をもつ地盤の存在そのものが「地すべりの主因」となるのです。

ところで関田山脈の地盤が若い地質であるため、降雨や土石流、洪水などによって簡単に山腹の崩壊や渓流の浸食などが起きます。渓流や沢が深く掘られると斜面が不安定になるので地すべりが発生しやすくなります。深部にあった岩盤も露出しますので風化が一層促進されます。

加えて、関田山脈の位置は日本海に近く、





関田山脈から頸城平野を望む

冬季に山脈を越える上昇気流が豪雪をもたらします。このため春になると雪解け水の地下浸透が活発化して地盤内部の間隙水圧を高めます。それが地盤を滑動させる「地すべりの誘因」になるのです。

地すべりの誘因には融雪水のほか、梅雨期や秋霖期、豪雨などの降雨に起因する比率が高く、ときに地震や火山性マグマ、断層などの活動、あるいは人工崖、湖沼などが誘因になる場合もあります。

これらが、関田山脈が日本一の地すべり多発地帯といわれる基本的なメカニズムです。

## 関田山脈と人びとの暮らし

冬季になると、日本海の水蒸気をたっぷり含んだ低気圧が台風なみに発達して東進します。このとき海岸線からわずか二〇～三〇キロメートル付近に標高一千メートル級の関田山脈があるため、山脈を急上昇して越えていく気流は大量の降雪をもたらします。

板倉町の柄山集落では、昭和二年二月一三日に積雪深八・一八メートルを記録しました。これは「人が住む場所で世界一の積雪深」であるとしてギネスブックものです。

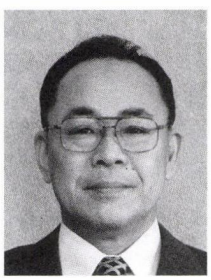
関田山脈は、特筆される日本有数の豪雪地帯であり、地すべり多発地帯であるにもかかわらず、標高七〇〇メートル付近までの大地に多くの人々が田畑を耕作しています。なぜ、多くの人々の暮らしが営まれているのでしょうか？

かつて、まだ建設機械がなかった頃を想ってください。地すべりが起きた跡に手間をかけると棚田が造れます。地すべりの発生は、水が誘因ですから稲作が可能です。つまり、関田の大地では、豪雪や地すべりといった自然災害と戦いながら、斜面管理や水管理に汗を流してくれる人々が上流域を護っている、ということなのです。（ですから昔の人は、山の人にニンベンをつけると仙人になり、谷の人は俗人だ、と言ったそうです。）

もしも上流域の人々が、その営みを放棄したらどうなるでしょう。太平洋戦争の四～八年ほどの間、中山間地に対する防災基盤整備の投資が鈍りました。その結果、終戦後三〇年を経ても自然災害の多発に見舞われ、多くの生命を失ったことを我々は忘れかけています。

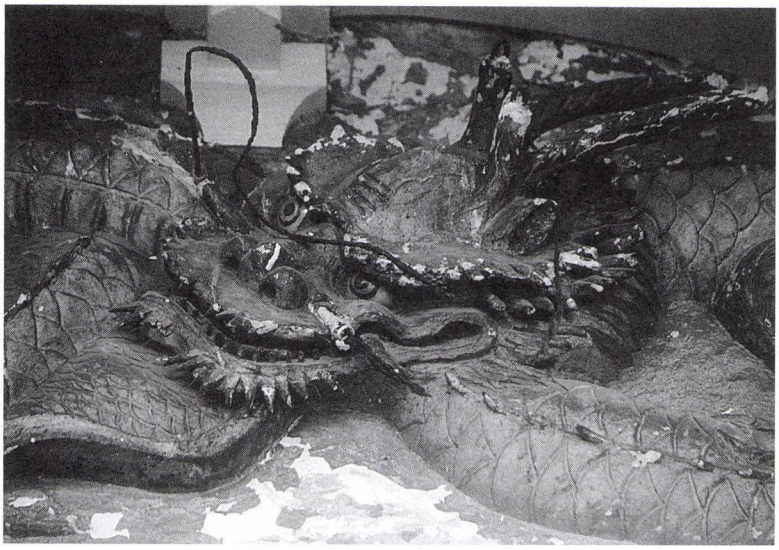
すなわち下流域で経済的・物質的に豊かに暮らす都市を護っているのは、じつは上流域の中山間地なのです。ですから、もっとも肝心なことは、大自然の営みのなかで人間活動を大きな目で判断する「公」を考えることなのではないでしょうか。

都市は滅ぶことがあっても、農山村が滅んで都市が繁栄した例は、人類史上どこにもありません。これは歴史が証明しています。


1945年生れ
1969年、新潟県に奉職
新井砂防事務所を経て
現在、土木部砂防課長



春日山の秋／撮影・匿名希望



# あまりにも 正統なるが故の異形

## ―観音寺向拝鏝絵―

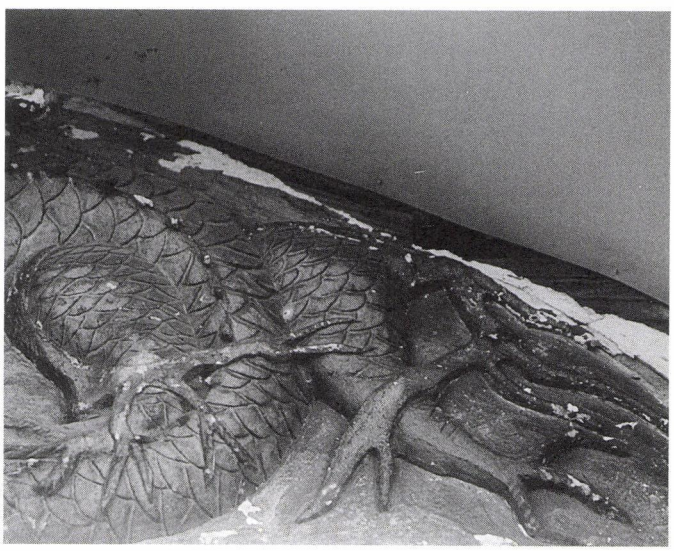
■佐藤 和佳子



鏝絵とは、蔵などに漆喰を使って「彫塑・彫刻」をするもので、色彩は漆喰の白だけではなく、顔料と混ぜて赤や青、黄色など実にカラフルである。山間の集落などで、蔵の妻側に家紋や火除けの「水」という文字をあしらった鏝絵に気付いた方も多いと思うが、蔵の戸前に施された精緻な龍や獅子のほか、大黒天やうさぎ、波千鳥などというかわいらしいデザインもある。また蔵ばかりでなく商店の看板（銀山温泉の看板が有名）を作ったものもあり、実にユニークで楽しい図柄を多く見ることができる。

鏝絵は建物を施工した左官の手になるものが主であるが、なぜ鏝絵が生まれたかも不明であり、またそれを施す理由も様々で、施主に依頼されたり、自分の仕事の印として壁の隅にちょっと鏝であしらったりしたもの、また、流しの左官が旅先で長逗留した礼に作っていったなどというものもある。制作年代は全国的に江戸末期から明治・大正が多く、そのデザインを見ると当時の土地土地の様子を窺い知ることができる地方独特のものがある。

左官は彫刻家ではないからデザインや技術は、いわゆる「ピンキリ」である。だから逆にこれは……と驚くような実に味わい深く「民俗的な作品」に出くわすこともあり、美術館や博物館などでお目にかかるような芸術作品（伊豆長八）として有名な入江長八の鏝絵は芸術作品として意識、評価される例外といえる）ではない分、ゾクっとするような恐ろしいものや、ホッと心が和むような作品に出会うこともある。そこが鏝絵の魅力だと言えよう。



実はこの鏝絵が上越市内にも何点かある。（注1）なかには（残念ながら）あった……というものもある。その中で特異な作品として直江津の観音寺の「龍」を紹介したい。お寺の龍といえば向拝（玄関）や欄間の彫刻を考えるが、観音寺は鏝絵である。



ギョロッと遠くを見すえるような鋭い目は、金環の中央に黒目を入れて周りを黒で縁取り、眉間のシワがいっそう眼光の強さを強調する。大きな耳まで届きそうな口には牙を生やし、そして何より顔の中心を占める大きな鼻。横に広がった小鼻も大きければ鼻の穴も大きい。まるで獅子頭を思わせるような人相ならぬ龍相だ。胴体はと見れば、実はここに一番力を入れたのではないかと思えるほど、鱗を一枚一枚丁寧

この鏝絵の作者の銘板が向拝の左側に打ちつけてある。これは稀な例といえる。

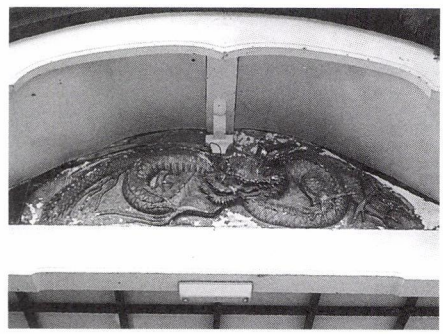
昭和参年御即位記念
寄附者
置物師　高野才次郎
高野正一
図案師　中澤幸作

右の年号で、先の天皇昭和天皇の即位記念として昭和三年に奉納されたことが分かる。置物師というのも聞きなれない言葉であるが、仏前に置く飾り物を作る職人という可能性もある。高野才次郎・正一は父子で、高野左官工業を営む高野武夫氏（中央4）の祖父・父君である。高野家には、正一作の漆喰製の「乃木将軍」（写真）像が残されている。作者が「左官」としないで「置物師」としたのには、作品に取り組む姿勢の違いがあったのであろうか。この置物師の意味については不明な点が多いので、ご教示願えれば幸である。

図案師の中澤幸作については、観音寺の須弥壇の柱に龍を彫刻した板を添えてあるが、その裏に幸作の名前が見える。やはり昭和三年に奉納したもので、新横町の住人となっているが子孫の方はまでは分かっていない。内陣の前を荘厳する欄間も彼の手になるもので、そこでは「藤原」姓を名乗っているので、それなりの腕を持った彫刻師だったであろうと想像できる。たぶん市内の他の寺院彫刻にも彼の作品を見ることができよう。ここでも「図案師」としているのは、どういうことであろうか。あわせてご教示をいただければ幸である。

（資料協力／編集部）





に律儀に刻み込み、尾に近くなるにつれて細かく小さくなっていく。玉を掴む手も力強く表現されている。

鏝絵にはしばしば針金を利用するが、この龍のまがりうねった髭も針金で作られ、残念ながら途中で折れてしまっているツノにも針金が刺さっていて、針金を土台にして作られているのがわかる。また、あご髭の漆喰が剥落している部分を見ると、やはり一本一本針金を使っている。

この作品は大変珍しい例として作者がわかっているが、もう一つ面白いことに、今までその存在を聞いたことがない「図案師」がいる。この下絵がどんな図案だったのかわからないが、子どもから大人まで、我々がイメージする恐ろしい「龍」そのままに、真正面からデザインしているように思う。左官も自分の「龍」のイメージに忠実に取り組んでいる姿が窺がえる。鼻息をフンフンいわせそうな大きな鼻、ギョロッと見開いた目、異常なほど細かく松笠状に刻み込んだウロコもイメージに忠実であろうとするために一種グロテスクで異様な感じさえ受ける。また、何より強そうにみせている顔も強そうに表現しようとするあまり、かえって滑稽にも見える。だが、そこが鏝絵の良さでもある。真面目なまちの職人が心をこめて作った心が伝わってきて感じがいい。



直江津には他に、聖母マリアをモチーフにしたと思われる母子と天使たち（注2）、豊かな肉体の等身大の女性（和洋折衷の姿態）（注3）、立派な髭を生やした天狗（注4）の鏝絵もあった。これらは昭和初期に作られたものであるが、観音寺の龍や天狗などの日本風な意匠にまで西洋的な雰囲気が感じられるのはなぜなのだろうか。また海辺のまち直江津にどうしてこのような鏝絵が作られたのだろうか。

冒頭で「鏝絵を通して当時の土地の様子を窺い知ることができる」と述べたが、この鏝絵を生んだ時代の「直江の津」の人々には、新しいものを臆せず「面白がって」受け入れることができる豊かな「気分」があったのであろう。

筆者／さとうわかこ　鏝絵研究者（京都府在住）

注1　加賀街道沿い、藤新田の道沿い、上門前、青田周辺の土蔵には正統的な鏝絵を見ることができる。

注2　星野左官店（まつみさ）の蔵に施されていたものである。専門誌にも紹介された特異なものである。

注3　中島の田中酒店二階の戸袋にあったもので、現在、大潟町の「お好み茶屋」のベランダに外から見えるように移転・保管されている。

注4　琴平神社本殿の土蔵の扉に施された天狗の鏝絵である。関川の河川改修で取り壊されるとき、たまたま見ることができたのであるが、小学生だった筆者には、あまりにもショッキングな光景であった。残念なことに数日の後、破壊されてしまった。私事であるが「文化財」の保存に後々関心を持つきっかけともなった出来事である。

フリースペース

# こんなまちがあった 2

## 『百歳バチャとそのふるさと——直江津町古城の思い出』

本稿は『百歳バチャとそのふるさと——直江津町古城の思い出』～甥や姪のみなさん～と題して、八木登美男氏が母親ハルさんの百歳の賀寿を記念し、ふるさと古城地区を中心とする直江津のことやまちの風物を記録して一冊にまとめたものを了解を得て抜萃したものである。イラストもすべて筆者が描かれた。八木ハルさんは一九〇一年（明治34）に生まれ二〇〇一年（平成13）一月に百歳を迎えられ、文字どおり20世紀を生きた人である。

八木登美男　やぎとみお

### 子どもの頃のあそび

子どもの頃は近所の上級生、下級生との繋がりの中で遊んでいたように思う。上級生は我々の知らないことを教えてくれたし、ものを作るのを手伝ってくれたりした。親や兄弟が教えてくれないような良いことも悪いことも、上級生は興味深く教えてくれるのである。

上級生は得意になって聞かせ、下級生はものめずらしく真面目に聞く。こうした風習の中で上級生は威厳を保ち、下級生は従うという関係が成り立っていたように思う。

もうひとつ今と違う点は、軍国主義華やかな戦時体制下だったから、学校のクラスも遊びも全て男女は別々だった。男の子がメソメソしていると、今では不適切用語として謹まねばならないような言葉で罵倒され「それでも男か」と一喝された。要するに女々しさは徹底的に排除された。男の子は男だけで遊び、女の子は女同士で遊んでいた。

私にはすぐ上に姉が二人いたので、家の中では時々、紙の「着せ替え人形」など「ボボさんごっこ」の相手をさせられたり、「双六」「かるたとり」など一緒にやった程度である。ほかに思い出せる女の子の遊びは、「おはじき」「ビー玉」「あやとり」「お手玉」「セッセッセ」「塗り絵」「写し紙」「あんたがたどこさ（手鞠つき）」「大波小波（縄跳び）」「いちけん（ケンケンパ?）」などであろうか。冬は糸の付いた針で釣り上げる「せんべ突っつき」「みかん突っつき」や「こっくりさん」もやっていたようだ。

以下、男の子の遊びを中心に思い出してみよう。

あそび道具は全て自分たちで作った。

**プロペラ飛行機**　翼は竹ヒゴを蝋燭の火で曲げ、ニューム（アルミニューム）管で接いで作り、ゴム紐を捲いて飛ばす。

**グライダー**　プライマリーというのが流行っていた。上級生は翼と同体を取りはずしできる大型グライダーを作っていた。

**厚紙飛行機**　小形のもので、先端に鉛が付いているので、ゴムを引いて飛ばすとスピードがでた。

**竹馬**　ありふれてはいるが、自分たちで作ったものである。

**空き缶下駄**　缶詰の空き缶に紐を付けて下駄のようにして歩く。最近、市販品で復活したようであるが、よく見るとズック靴で履けるように変わっていた。

**木製鉄砲**　引き金をゴムに掛け、紙製の火薬玉を打って鳴らす。硝煙の匂いがよかった。丸く渦巻き状に連続した専用の紙火薬で鳴らす連発式ピストルも売っていた。

**水鉄砲**　スタンド型のものは難しいが、手押し式の簡単なものは却って遠くまで飛んだ。

**紙鉄砲**　水鉄砲の小形の形であるが、竹筒の先に紙を噛んで詰め、勢いよく突くとポンと飛び出る。

**竹とんぼ**　羽根は小刀で根気よく作る。（小刀は「切り出し」とも言っていた）

**パチンコ**　股木にゴム紐を付けて、小石を飛ばす。

**鉱石ラジオ**　電気屋さんから鉱石を買ってきて、配線をハンダづけする。微かに聞こえてくるのが嬉しかった。

**チャンバラごっこ**　鞍馬天狗や、丹下左膳になったものは、何回切られても死なないことになっていた。

**鬼ゴチャ**（鬼ごっこ）　ボッカケ（追い掛け）られて、捕まった者が鬼になる。

**陣とり**（国取り）　これも大勢でやっていた。

**馬のり**　前の人の股に頭を突っ込んで並び、その上に飛び乗る。重い人が乗るとつぶれる。

## 夏

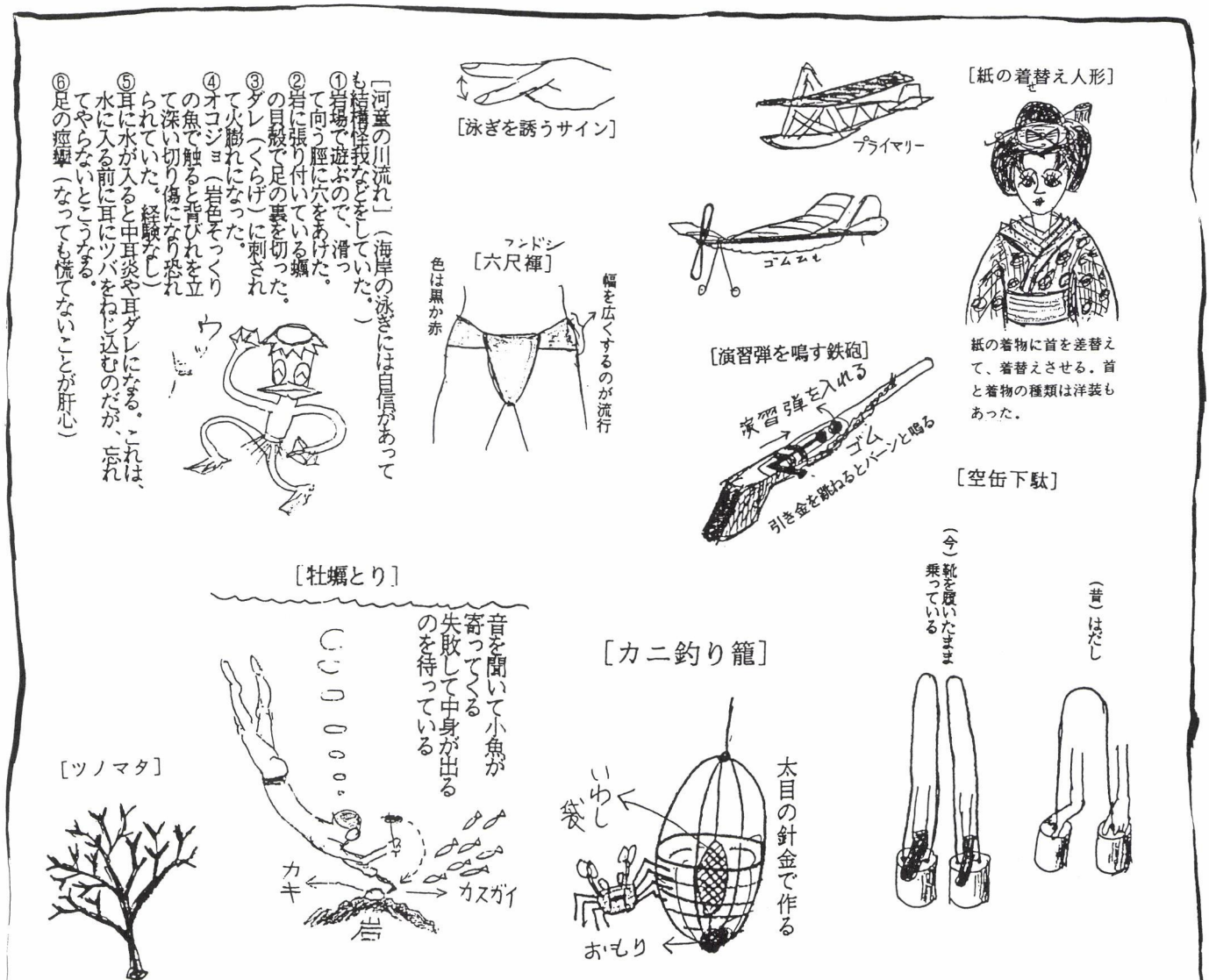
**泳ぎ**　「あびに行く」と言っていた。仲間を呼び出すときの暗号はブイサインで指を動かす。六尺褌一本ポケットに入れて行く。場所は大抵は直江津の浜や、高崎の浜の突堤の岩場である。直江津の浜には山崎屋旅館の下に体操指導員の台があり、海の中には木製の飛び込み台が置いてあった。

近くではドックや荒川で泳いだ。ドックの水は工場の排水で赤くなり、川から流れてくるゴミが溜まり汚れていた。ときどき、潜って水面に浮かび上がったとき、目の前に猫の死体が浮いていることもあった。耳の後ろに赤い水苔がこびり付いてとれなかった。今なら遊泳禁止区域であろう。よく病気にならなかったもんだ。

古城橋の欄干から飛び下りる日本男児としての儀式もあった。中途半端に飛び込むと腹を打ち、息が止まることもあった。

泳ぎの覚え始めは二、三年生になると、上級生が沖に連れていってすっぽかすのである。そこからひとりでショッパイ海の水をのみながら遮二無二岸に泳ぎ着くのである。青い顔して、唇を紫色にして、「ゲーッ」と汗を吐きながら、スパルタ式で覚えていくのである。

土用の丑の日に海に入ると、あせもが出ないし、風邪をひかないといわれていた。今は



うなぎを食べて精力をつけるというが、当時は「どじょう汁」や「鯨汁」だった。

また、お盆が過ぎると、「ダレ（くらげ）がでるし、波が高くなるので泳ぐな」といわれていた。

子供の水死事故はカッパの悪戯だといわれていたので、カッパの好きな胡瓜を橋の上から川に投げてから海に泳ぎにいったものである。

**牡蠣とり・ヤス突き・バイとり**　高崎の堤防には岩があり、牡蠣が着くので、金槌とカスガイを持って潜ってとった。これも高崎の堤防でやるのだが、ヤスを持って潜り、チン鯛、はちめ等を突く。直江津の浜で少し沖にでて潜るとバイが捕められた。

また、昔のドックは陸側は桟橋だったが、海側の対岸は砂浜だった。その砂底に足や手で探ると小石のような物が当たるが、それが小さいシジミだったことを覚えている。しかし、終戦頃にはもう消えていた。

**ツノマタとり**　着物の洗い張り用の糊に使う海草で、直江津の突堤の岩によく着いていた。潜ってとるのだが、取ったものを一時、褌の間に挟んでおく。ところが、この海草にはえび型に折れて跳ねる小さい虫が付いていて、チクチクしたもんだ。今は見られなくなったが、当時はどこの家にも「張り板」があって、着物の洗い張りにこのツノマタが使われていた。

**ヨー釣り（魚つり）**　家の周囲には小川がないので、もっぱらドックでグズ釣りをしていた。ハゼのことを通称グズという。大きいものを三年グズという。ドックの入り口に行くと、川に海水が入ってくるので、フグやチン鯛も釣れた。田圃や小川にいくと、鮒、メダカ、イトヨ、朝鮮鮒などがいた。

**カニ釣り**　四、五月には鰯がとれるので、それを餌にした独特のカゴを作り、直江津の堤防で釣る。大きいのをモクガニと呼んでいた。モクズ蟹と形は同じ川蟹だが海水の中で生息していた。

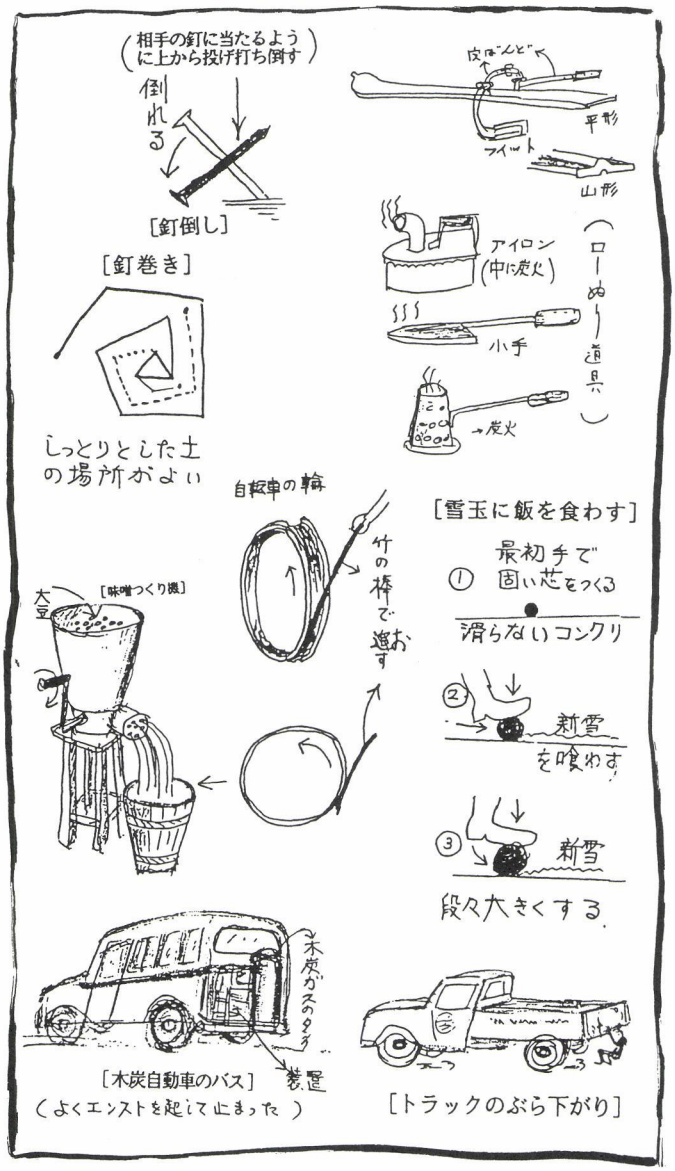
**ボエ拾い**　嵐の後に高崎の浜に行くと、川から流れてきた木がたくさん打上げられる。それを拾ってきて薪にする（遊びでもあった）。胡桃もたくさん打上げられた。

## 冬

**スキー**　直江津は海岸だから高田に比べたら雪は少ない。しかし、子どもスキーはできた。場所は近くの明治山、倉庫の屋根、少し乗れるようになると今の西本町四の山王山（サンノウ（ン）サン）や台場（江戸時代の海防用の砲台跡）へ行く。そこは急坂でスロープは波打ち際まで延びていた。上手な人は金谷山や赤倉へ連れて行ってもらった。

**雪玉わり**　雁木のコンクリの上で小さい雪玉の芯を作り、これに新雪を被せて固く大きくする。その固い玉をぶつけ合って相手を割ったほうが勝ちとなる。固くするときは「飯を食わす」といって、滑らないコンクリの上に新雪をまき、長靴で押し付けながら転がし強靭な雪玉にしていく。

**日光写真**　感光紙に白黒を反転した薄紙のネガを重ねて器具に挟み、しばらく日光に当てておくと映る。



## 通年

**三角野球**　テニスボールを投げて、握りこぶしのバットでやる野球が流行っていた。三角ベースとも言った。

**三角股乗り**　大人用の自転車で三角股乗りを練習した。乗られるようになったときのうれしさよ。

**釘巻き**　釘を地面に投げ刺し、失敗するまで点を結んで囲んでいく。相手はその線の間を抜け出る。

**釘倒し**　五寸釘を地面に立っている相手の釘にぶっつけて倒す。

**パンチョ**　めんこ、またはパッチのこと。やり方は板の上から外へ出すのと、ひっくり返すのがある。種類は角パ、丸パ。大きいのをジャバと呼んでいた。勝ったら取り上げてしまう「本コ」と、終ったら返す「嘘ッコ」というのがあった。また、直径二センチ位の厚紙の小さいパッチ（名称は失念）があった。これはコツンとぶっつけて返す遊びと、もうひとつ、淵に蝋が付いているので、親指と人差し指で挟んで飛ばして遊ぶ方法があった。

**輪っか転がし**　自転車の芯（スポーク）のない淵だけのリングを竹の棒で押しくって転がす。

＊＊

**トラックのぶら下がり**　昔は道路はジャリ道だったから、無数に穴が開いていた。トラックはスピードを出せず走るもんだから、容易に後ろにぶら下がることができた。待ち構えていて、ガソリンの匂いを嗅ぎつけると、追い掛けていってぶら下がったもんだ。「危ないから止めろ」とよく叱られた。ちなみに当時のトラックは三トン車だった。ぶら下がっている目の前に書いてあるので覚えてしまった。

トラックといえば叱られた印象のほうが強いが、動けなくなったトラックの後押しをして助けてやったこともある。また、戦時中の乗合自動車はガソリンがないので木炭自動車が走っていた。

**お八つ代わりの「こびり」**　お八つというきまった時間に食べる習慣はなかったが、何も食うものがないとき、こびり（小昼）といって、にぎり飯を作ってもらった。腹が減っているときはウンマかった。塩より味噌の方がウンマイと思うのだが、なぜか味噌はあまり付けてくれなかった。生味噌は体によくないのだろうか。

味噌といえば、餅搗きと同じように味噌作り機を順番に借りて各家で一年分を作っていた。大豆を煮て機械に入れてハンドルを手で回すと、ニョロニョロと出てくる。ひき肉の器械を大きくしたようなものだった。それに塩と糀を混ぜて寝かせておく。

自家製の味噌は味も香りも強かったように思う。昼どきや夕方になると家々からプーンと味噌汁の匂いがしてきたものである。そのオッチョ（味噌汁）をこぼしてはよく叱られた。こぼすと味噌の匂いが取れなかったもんだが、昔の味噌はよっぽど濃厚だったのだろう。

■プロフィール
一九三二年上越市（直江津）生まれ。
高田中学校中退、電気通信省（現ＮＴＴ）入省。一九八八年退職。長岡市在住。



**国府別院　浄土真宗本願寺派**

文化２年（1805）建立。約 16 m四方の総欅造り。市指定文化財になっている。

親鸞聖人の旧跡にふさわしく、須弥壇に本尊阿弥陀如来と親鸞聖人像が並べられている珍しい形式。

本堂は格天井になっていて、一つ一つに極彩色で花鳥草木が描かれ、内陣も天井だけではなく柱、斗供にまで、あますところなく極彩色で装飾されている。市内では類例のない豪華さと美しさである。

# 海西東陸



越前を巡っている車中で「嶺南・嶺北」ということが話題になった。このあたりいると、たしかに天気予報がこの言葉で分けられている。

廃藩置県が敦賀県を作り、敦賀に県庁が置かれたことで「木嶺以南」「木嶺以北」という地域意識ができ、明治四一年に福井県が独立するにあたって南北にシコリを作ってしまった。

木嶺とは、敦賀市の東方にある「木ノ芽山嶺」のことを指す。北陸本線、北陸自動車道の北陸、敦賀の両トンネルが穿たれた嶺々である。その間には山中峠、木ノ芽峠、北国街道であった栃ノ木峠がある。

福井方面の人たちが、これらの峠を越えて県庁へ行くのが難渋あるいは不満だ、ということから生まれた言葉、といわれている。

しかし、嶺南は関西型、嶺北を北陸型と分類するのは、この山嶺が大きく自然・風土・民俗を分けて、違いがあるためで、右のような行政史的な視点だけでは簡単にくくられないものがあるようだ。証拠というのも大げさだが、福井市のブライダル店では、嶺の南北で結納に違いがあるので気を付けるように、と言っている。

『古事記』に、武内宿禰命が仲哀天皇の太子（神功皇后との子）をつれ、若狭国から入って「高志の前の角鹿に仮宮を造りて……」とある。角鹿とは敦賀のことで、「コシノ ミチノクチ ノ ツヌガ」とは「越の入口である敦賀」と、言ってるのではないだろうか。

北陸自動車道を敦賀、今庄トンネルを抜けて、福井平野めがけて一気に坂を下っていくとき、何んとはなしに、ほっとするのは「越」に入ったせいではないかと思う。

奥州へ落ちる義経一行も親鸞聖人もこの嶺を越えて「越」に入った。謙信は上洛の行き帰り、この峠を越えたのだろうか。信長は峠を越えて一乗谷の朝倉氏を滅ぼした。

峠を越える理由はどうあれ、彼らは嶺のむこうにどんな世界を想像したのだろうか。

蒲原政治という言葉が、いつ始まったかは知らないが、その昔、頸城がこの国の中心であったころ、「米山から奥」という言葉があったそうである。これは都から見ての表現である。柏崎まではなんとか見通せたらしいが、それでも米山からむこうはよく分からない世界だったようだ。

この頸城平野に立って三方を見わたせば、よく分かることだが、どこへ行くにも峠を越えなければならない。

富倉峠を越えて飯山へ行く道を私たちは「飯山街道」という。飯山の人たちは「直江津街道」というらしい。このことは、峠を越えた先の世界を道の名前が物語っている、と言えないだろうか。

それを十把一絡げのようにして「奥」と言い切ってしまうのは、都びとにとって、米山から奥は「未知」というより「異界」であったのかもしれない。

小黒専敬寺の前を西に向って坂道を登り、切り通しになった峠に立つと、わずかに開いた谷間に五智周辺の山なみと日本海という、思いもよらない風景が目に入ってくる。

峠には「小丸山遥拝地　小丸山同行中」と彫られた姿のいい自然石の碑が建っていて、ここから、宗祖親鸞聖人が流謫の日々を送った、聖地「小丸山」を拝むのである。日の沈むころであれば、まさに西方浄土に向って手を合わせることになる。

この碑をながめていると――峠のむこうに聖地が見える――という、特別な想いが伝わってくる。

＊

嶺が、あっちとこっち、人間界と異界の結界ならば、峠はそれを切るものであろう。

まあ、そんな小難しいことはともかく、背伸びしても見えるはずがない山のむこう側を、爪先立って「あの山のむこうで、今、どんなお祭りをやっているんだろうか」という、想像力を持つ力がある人ならば、それだけで十分、峠を目指して登り始めてもいいんじゃないか！。

（洟）

# 読者から

数年前になりますが、京都から鈍行列車を乗り継ぎ、新潟の友人宅まで訪ねたことがあります。いいかげん退屈した頃に親不知、筒石の冬の絶景が見えてきて、車窓に満足した頃、直江津に着きました。ちょうど信越本線の接続が悪かったので、夕暮れどきの駅前をぶらつきました。静かな町でしたが、北海道や東北のようにことさら《北国》を感じさせるわけでもなく、どことなく不思議な感じがしたものです。《汽車》という響きがしっくりくるような平屋の駅舎も風情がありましたね（建て替えられたそうで少し残念です）。

以来、越後路を旅したことはありません。徳川夢声を中心とした戦後文化人について調べているので、柏崎の「石黒敬七とんちん館」は前々よりいきたいと思っていますし、杉み き子さんが書いておられた《直江津の坂道》も一度ゆっくりと歩きたいものです……。

「直江の津」はさまざまな角度から地元を紹介されていますが、ことさら地元経済を持ち上げるわけでも、歴史文化を無理やり発掘するわけでもないように感じます。《地元ＰＲ》の押しつけがましい色彩のない誌面は、気まぐれで歩いた駅前の雰囲気とよく似ているなぁと思いつつ、読ませていただきました。

＊

勤務先が事務局をしております路上観察学会の活動につきまして以前、「直江の津」で取り上げていただき、うれしく思っております。《平成の芭蕉》を気どった路上のメンバーと私も越後路を歩きたかったのですが、その機会に恵まれませんでした。直江津を歩いたのは藤森照信、南伸坊コンビでしたが、ご両人ともお気に入りの町だったそうです……。

濱田研吾（東京在住）

＋

「直江の津」が有料になったというので、なおえつ茶屋へ行って買わしてもらいました。

小難しいことも書いてあるけど、我慢して読むと、結構おもしい話が書いてあって、オラも今は「緑の島」に住んでいるけど、なるほどと思って、知らんかったこてね。

それより「こんなまちがあった」は、ほんとに、おもしかった。オラ、子どもの頃の話だねかね。

もっと、なんかあったなぁーと思うんだけも、字には、なかなか書かんないこてね。

上越市せったって、直江津は、どーしょもないねかね。

祇園だせったっても、終われやもう終わりで、もう、一年終ったみたいだねかね。そいな直江津らしいんだけも。

がんばってくんないやね。

＊電話での感想をできるだけ、原語で再現しました。

## 投稿募集

「直江の津」では投稿をお待ちしています。

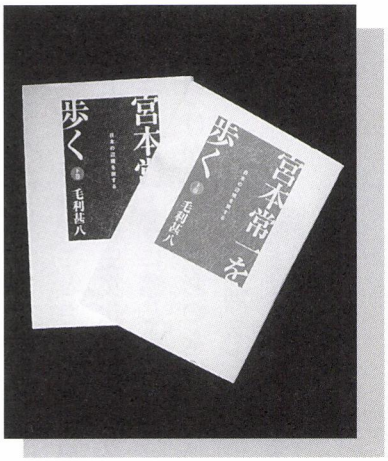
本誌の企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、読者の研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが、掲載について、編集部で多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

# ■読書びと




## 宮本常一を歩く

毛利甚八著

小学館刊
（上・下共一四〇〇円）

我が敬愛する写真家濱谷浩の自伝『潜像残像』（筑摩書房）に印象深い情景が描かれている。一九三九年、スキー部隊の冬期演習ルポで高田を訪れた濱谷は、豪雪の町を彷い一軒きりの喫茶店（四月堂）で市川信次と出会う。そしてその紹介で渋沢敬三に師事することになる。渋沢は財界人でありながら、第一級の民俗学者として知られ私設のアチック・ミューゼアム（屋根裏博物館）と銘した研究集団を組織していた。翌年二月、濱谷は谷浜村西横山に入り前後六日間の小正月の行事を撮影する。

後に『雪国』と題された写真集で「越後の谷間のたった二五軒の寒村に、この雄壮な生活の古典を見るとき、そこに長い歴史を経過してきた精神生活の深さ、豊かさを見ることができる。」と自註する。渋沢に導かれた視点が、濱谷の写真と生活の方向を大きく変えた。

濱谷に先んずる一九三五年に渋沢敬三と出会い、戦中、戦後を渋沢の食客となりながら日本列島の隅々まで民俗調査の旅をした男がいる。柳田国男や折口信夫の陰に隠れ近年では忘れられかけていた宮本常一（みやもとつねいち）、その人の名を私達に強く思い出させたのは、剛腕のノンフィクション作家佐野眞一であった。

『旅する巨人』（文藝春秋）として刊行されたその宮本常一の評伝は、また必然的に偉大なパトロネージュ精神を具現化した渋沢敬三をも再発見することとなった。〈忘れられた日本人〉を追い求めたこの二人の希有な関係を見つめ直すことが、とりもなおさず現在の私達が掘り起こそうとしている〈つましく美しい〉地方の有り様のヒントとなることを実感させてくれる瞠目すべき仕事であった。

そして佐野とほぼ同時に、世紀末の日本を宮本の跡を追って歩き続け、足掛け四年の旅をしたもう一人のルポライターがいた。

毛利甚八（もうりじんぱち）は一九五八年長崎県佐世保市郊外の山村に生まれ、日本大学芸術学部文芸学科を卒業。雑誌記者として各地を取材する。写真家（本書のポートレートも秀逸）、シンガーソングライターとしても活動、そして八十年台のコミック界に強烈な印象を刻んだ『家栽の人』（小学館）の原作者としての一面ももつ。ガーデニングという言葉がまだ認知されていない当時、野山と園芸を愛する家栽判事桑田が出会う様々な家族の姿を描き、離婚・遺産相続・親権・少年犯罪に向かい合う連作だった。

一九九八年に上梓された『宮本常一を歩く』は、七三年間の生涯に十六万キロ（地球四周分）という気の遠くなるような行程を、四千日にわたって旅したこの民俗学者の足跡を、文字どおり辿り歩いた十四回の旅の記録である。

加賀白峰、吉野、出雲、日向の農山村や、佐渡、対馬、西海の島々まで、半世紀前に宮本が見た風景を切り口に、土地の古老と語り合う。

毛利は、宮本常一の膨大な旅が宮本を幸せにしたかこだわり続ける。民俗学者としての貌以外に、政治・行政、農業指導、地域振興の面でまさに八面六臂の行動のすべてを、冷徹に、そしてその弱さを含め批評の枠外で追体験しようとする。『家栽の人』の主人公と同じく、心に介入するのではなく、見つめることによって、その人のもつ根源の悲しみや怒りを人間の関係の場にあらわにさせる手法を貫く。

直江の津の対岸、小木町宿根木（しゅくねぎ）の町並保存やアチック・ミューゼアムを彷彿とさせる小木民俗博物館の現場からの発信をみても、「旅と本が成ったことを素直に誇りたい」という毛利の結語に大きく同感できる珠玉の作品である。

目くそ鼻糞を笑うこの政争の町の諸兄よ。身の丈に怯まず、パトロネージュの醍醐味を野に取り返す時と思うが如何に。

（呻）

## ■情報

### 〈濱谷浩写真展〉

**■上越市立総合博物館**

**平成一四年一月二〇日まで**

記録保存を第一として考え、常に人間とそれを支える自然との関わりをレンズを通して記録・検証してきた濱谷の作品が上越市に収蔵されているが、今回、企画展として「越後」「桑取谷」「裏日本」「見てきた中国」「地の貌」「學藝諸家」「私」が展示されている。

そのなかの「私」は、さまざまな人たちによって撮影された濱谷自身の写真である。五歳の誕生日から、湘南文庫から出版される『私』の編集が終って風呂でくつろぐ写真までの、一六五点が展示されている。

はばかりながら一言口上
写真とは如何なるものであるのか
人の一生とは如何なるものであるのか
写されてくだんのごとしであります

### 〈鰤のきた道展〉

**■松本市立博物館・日本民俗資料館**

**平成一四年一月一四日まで**

信州の松本をはじめとした中信・南信地方では、歳取りの魚は「鰤」である。越中で獲れた鰤は飛騨の山々を越えて松本にやってくる。ために、人たちは「飛騨鰤」という。

この企画は、出世魚鰤の魅力と鰤がきた道「鰤街道」をたどる。

読者のなかに、二、三代くらい前の先祖が松本へ魚売りに行ったという方もあるのではないだろうか。はるばる松本の地で、先祖の足跡を偲ぶことが出来るかもしれない。

### 〈米沢市上杉博物館〉

**■**山形県米沢市丸の内（電話すると「伝国（でんごく）の杜（もり）です」という返事があるので注意。鷹山公の「伝国の辞」に因むものである）

今年の九月、米沢城跡の目の前に置賜（おきたま）文化ホールという能舞台を持つ文化施設と博物館がひとつになった建物が生まれた。

博物館では謙信・景勝・兼続が入館者を出迎え、米沢中興の祖・鷹山シアターへと導く。

しかし何と言っても、織田信長が謙信に贈ったという狩野永徳作・国宝「上杉本洛中洛外屏風」など、上杉家の重物を設備の行き届いた施設で観覧できるのは嬉しい。なかで目を引くのは「上杉家文書（もんじょ）」である。上杉家代々の手紙類が一点一点、表具することなくそのままの形態で保存されていて、当時の文書の様式が分かることである。小藩にして家格の高い上杉家が求めたアイデンティティーとは、これだったのかと思う、この文書収集が凄い。届いた手紙が残っていても当然であるが、謙信や景勝の手紙を江戸時代にあて先から取り戻していることである。国宝に指定されたこれら手紙類も見ることができる。

稽照殿（けいしょうでん）の謙信や景勝の鎧兜、兼続の有名な「愛」の前立ての兜も合わせて見ると、春日山城の昔が分かるかもしれない。

## ■バックナンバー■

**2001年3月　第1号　春号**（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津　―中世都市・越後府中・直江の津―　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ
　水族館になにを見るか　中村幸弘
フリースペース
　石痩庵主 茶人宗次という人　平丸誠
読書びと　『夢の途上』工藤美代子著
見る目　神饌箱
特別寄稿
　老いるとは 心理学的立場から 高嶋正士

**2001年6月　2号　夏号**（残部僅少）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ　―直江津の産業史―　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」―囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町屋の人形さま巡り
知の楽しみ
　妙高山　現在・過去・未来　早津賢二
フリースペース
　茶室見学ノート　石痩庵　佐藤昭夫
講演
　生活に潤いを 地元の文化を大切に 小林新治
読書びと　『諫早菖蒲日記』野呂邦暢著
見る目　シンボ凧
インタビュー
　坂詰吉寛さん
私の直江津　世界の果て　杉みき子

**2001年6月　3号　秋号**
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ
　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース
　こんなまちがあった　八木登美男
講演
　「都市景観」から地域と歴史を考える 浅倉有子
読書びと　『画家の妻たち』澤地久枝著
見る目　織部柳図徳利
私の直江津　分岐点　吉越泰雄

# 見る目

## どぶね

ドブネ型の船は若狭湾以東の日本海沿岸に分布し、定置網型、雑漁型、地引型の三つの類型がありました。新潟県では地引網ドブネが西頸城郡青海町から西蒲原郡巻町にかけての砂浜地帯に広く分布していました。これらは主として地引網漁業に用いられた沿岸漁業専用の漁船で、その土地の生活に深く結びついていました。船体は軽量で、比較的寿命が長く、また、船足は速く、操船は主に櫂によって行いました。現在は使用されることなく、上越市立水族博物館や新潟市立郷土資料館、大潟町役場などに数隻が保管されています。

ドブネの特徴は、左右の舷側下方をL字型の刳りぬき材で構成する構造にあります。この刳りぬき材はオモキと呼ばれ、刳り船（丸木舟）の工法を残しているもので、船体構造の発達過程を知る上でたいへん貴重な資料であるといえます。オモキに使う原木には根元に曲がりのあるスギの大木が選ばれました。これを挽き割ってとりだされたオモキ材は船尾から船首先端まで継がずに通っており、船首部の曲面を刳り出すときには根元の曲がりをうまく利用しました。船体はこのオモキと側板上部を形成するハタキ、および船底部をなすチョウから形成されています。チョウ（シキともいう）は厚さ六～十二センチくらいの板を用い、これを二枚か三枚接ぎ合わせます。

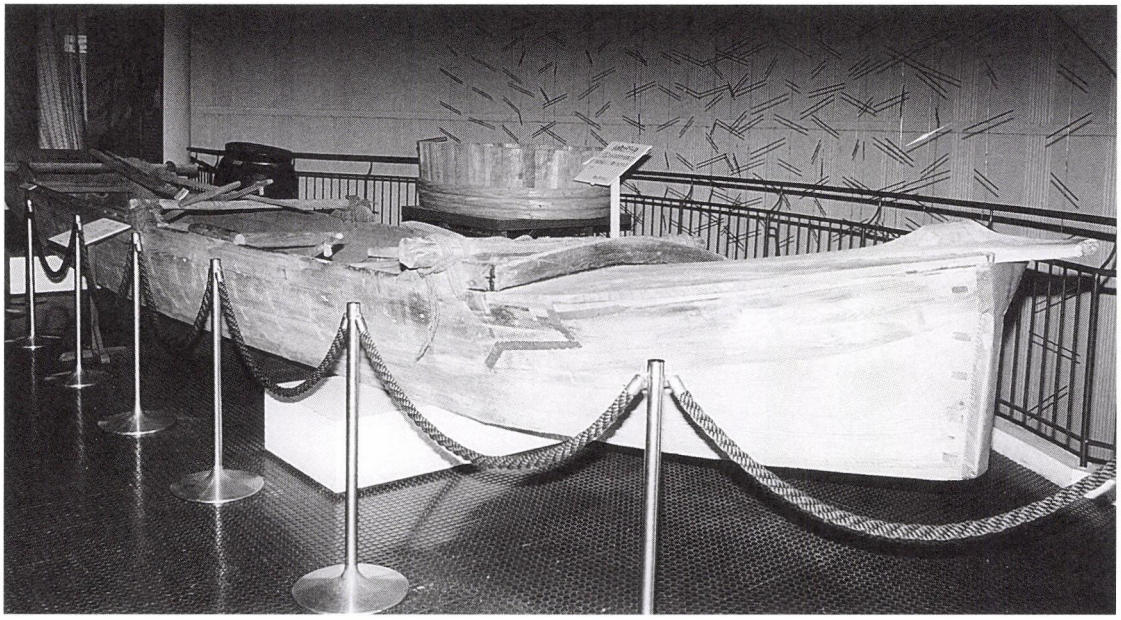
製作にあたっては船釘を使用するものとしないものとがありますが、このドブネは材料の接合に際し船釘などは一本も使っていません。チョウの接ぎ合わせ、チョウやハタキとオモキの接合には木栓タタラや鼓型をした木製カスガイのチキリという接合片と、接着剤として漆を使っています。チキリの材はクサマキで、一隻のドブネに使用されるチキリの数は約五〇〇から六〇〇個といわれます。タタラの材もクサマキを用いましたが、クリを使うこともありました。タタラとタタラの間には、表にチキリ二個、裏にチキリ一個というのが標準的なはめ込み位置といわれています。

また、船首が三角で、その上面がバン（蓋）と呼ぶ波防ぎ板でおおわれ、船尾はトタテ（戸立）と呼ぶ底板の一部からなっていることなどもドブネの特徴です。

ドブネの名の由来には諸説がありますが、漢字では「胴船」「道船」「筒船」「土船」「洞船」「筏船」などと記されます。

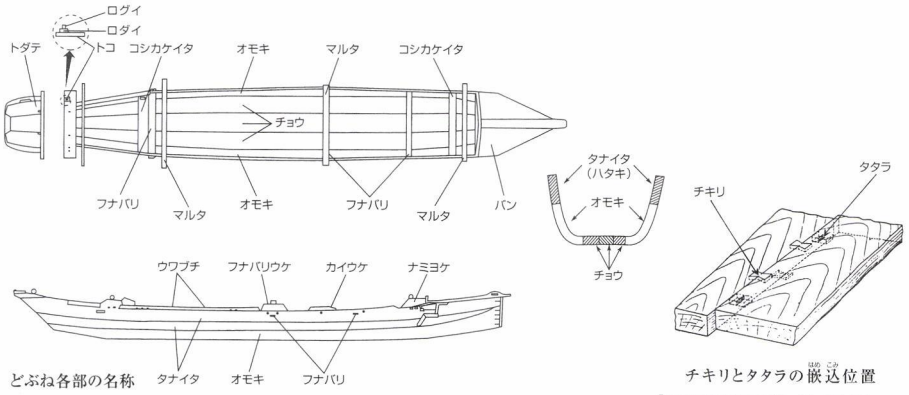
当水族博物館のドブネは、明治三四（一九〇一）年三月に糸魚川市浦本の永越猪之松氏によって製作されたものです。昭和二九（一九五四）年七月に当館に寄贈された後、造船史上貴重な資料として昭和三〇（一九五五）年二月九日には新潟県文化財として指定され、さらに同年四月二十二日には国指定重要有形民俗文化財となっています。

・「直江の津」が購入できる所
なおえつ茶屋
柿村書店
エルマール・ブックセンター
春陽館書店



■国指定重要文化財
種　別　有形民俗
名　称　どぶね
指　定　昭和33年4月22日
管理者　上越市立水族博物館

大きさ　長さ10ｍ　幅1.5ｍ
深さ50㎝
板厚　4～5㎝




どぶね各部の名称

チキリとタタラの嵌込位置
『無形の民俗資料記録　第一集』より

■馬場正志（ばばまさし）・上越市立水族博物館学芸員■

参考文献
山口昌子（1995）『日本と周辺アジアの伝統的船舶』（文献出版）文化財保護委員会（1962）『無形の民俗資料記録　第一集』（青樹印刷株式会社）

## ■編集室から■

ようやくというか、あっという間にというか、季節が一順した。秋号から書店で販売することになって、反響をいただいている。思わぬところに思わぬ読者がいて、掘っているつもりが、掘り起こしてもらっているのではないか、と思う日々である。

南木氏の「農村が滅びて都市が栄えた例はない」という言葉は、昨今の周囲の状況を見るにつけ、はっとさせられる。

古老が語る熱気溢れるまちへの想いには圧倒される。「全然古くない」というのは、我々が引き継がず、何もしなかったということであろう。

いよいよ、二順めにはいる。熱きご支援を。

投稿・内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五五(四三)九七一五
FAX〇二五五(四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

「直江の津」（季刊・第一巻四号）
発行日／平成十三年十二月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五(四五)〇二〇二
発行者／直江津信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

# 季刊 直江の津



発行／平成十三年十二月二十日■発行所／直江津経済文化研究会■発行者／なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)